

学習者のオンライン学習環境への準備と学習姿勢の変化

Learner's Readiness for Online Learning Environment and a Change in Learning Attitude

根本 淳子^{*1,*2}, 平岡 斉士^{*2}, 鈴木 克明^{*2}

Junko NEMOTO^{*1,*2}, Naoshi HIRAOKA^{*2}, Katsuaki SUZUKI^{*2}

^{*1}愛媛大学

^{*1}Ehime University

^{*2}熊本大学大学院教授システム学専攻

^{*2}Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

Email: nemoto.junko.nu@ehime-u.ac.jp

あらまし：オンラインでの学習を円滑に進めていくためには、学習者をオンライン学習環境へ順応させつつ、学習者自身の主体性を高める必要があるという考えのもと、オンライン大学院の入学者を対象にオリエンテーション科目を提供してきた。本発表では過去5年間の実践結果をもとに、学習者の学習に対する姿勢がどのように変化したのかを確認する。

キーワード：オリエンテーション、オンライン、学習環境、学習姿勢、

1. はじめに

新たな学習環境での学びを実現するためには、学習環境に順応し、学習を推し進めるための様々な準備が必要となる。教授システム学専攻では入学予定者を対象に、オリエンテーション科目を入学前の学習支援と位置づけ、開学当時から実施してきた。他の実践例などを参考に本科目を実施し、現在は安定的な運用段階に入ってきている。本発表では、オンラインのオリエンテーション科目が、学習者の学習環境に対する準備と学習姿勢に変化をもたらしているかどうか、学習開始前と開始後の自己評価結果をもとに分析した。

2. オリエンテーション科目概要

対象とするオリエンテーション科目は、eラーニング環境で学習するオンライン学習者向けに、オンライン学習に必要なスキルを習得し、加えて学習者が自ら立てた計画や目標に向かって学習できるようになることを意図して設計している。他の授業構成と同じように15回構成とし、4ブロックに分けて実施している（1）教員紹介を含む導入、2）PCやメールなどの学習環境の確認、3）学習計画の立案、4）前期学習の進め方の確認。本科目の内容整理のために、Parrishが掲げる個人の学習レベルを高めるために必要な「学習者個人にかかわる要因」4要素⁽¹⁾を用いてオリエンテーションを整理したところ、この4要素が含まれるほか、技術的な知識を問う活動から学習プランに関する、メタ的なスキルを含む計7種類の学習活動を含むことを確認した⁽²⁾。

そこで、調査翌年から、これらの7つの学習活動それぞれに対する準備状況を、科目の最初（タスク1）と最後（タスク15）に自己評価する活動を追加した。本評価には7活動に関する設問をそれぞれ2-3

問が含まれ、合計19問の6件法の選択肢（5.とても強くそう思う、4.そう思う、3.どちらでもない、2.あまり思わない、1.全く思わない、0.わからない）と自由記述1問の計20問で構成した。

3. 自己評価結果

表1に2011年度から2015年度の選択式の結果を示す。回答者は事前・事後それぞれ2011年度：18名・19名、2012年度：18名・18名、2013年度：17名・16名、2014年度14名・13名、2015年度：23名・22名で事前は90人、事後は85人からの回答があった。表にある「カテゴリー」は科目の中に含まれる7つ活動の種別を、「事前事後の変化」は、学習者個人の評価を個々に比較した際に、自己評価変化があったのか（↑または↓）、なかったのか（=）をそれぞれ示す。選択肢で「わからない」と答えた場合は、データをNAとして扱った。

事前事後の評価値には大きな変化はあまり見られなかった。事前事後の変化を個別に見ていくと、全体の3分の2程度は回答に変化がないものの（=）、3分の1程度には、事前事後の自己評価で変化見られた（↑または↓）。オリエンテーション活動を通じて学習者の中で何かしらの変化があったことがわかる。大半が社会人である入学生には学習に関する持論を持ち入学すると予想される。しかし、オリエンテーション科目で新たな知識を得たり、学習者間でやり取りをしたり、自らの振り返りを経る中で、自己評価に関する学習者の新たな考えを得た結果、評価が変化する可能性が示唆された。

学習者の評価基準が変わるための要因は科目中に含まれている。評価基準の変化がどの要因に起因したものであるかは、記述式や他の活動の結果からみていく必要があり、そこは今後の課題である。

参考文献

- (1) Parrish, P., Wilson, B., & Dunlap, J. Learning Experience as Transaction: A Framework for Instructional Design, Educational Technology (2010) [Retrieved from http://homes.comet.ucar.edu/~pparrish/papers/LearnExp%20As%20Trans%20_final.doc]
- (2) 根本淳子, 鈴木克明: “オンラインでの学びを準備するオンライン・オリエンテーションの分析”, 教育システム情報学会, 第 35 回全国大会予稿集, pp.95-96 (2010)

表 1 学習者の自己評価の変化

#	設問	カテゴリー	事前 (タスク 1)	事後 (タスク 15)	事前事後の変化			
					↑	=	↓	NA
問 1	教授システム学専攻で, 自分がどのような知識スキルを学びたいのかがはっきりしている	意図(Intent)	4.3	4.4	16	59	12	3
問 2	教授システム学専攻で, 自分が知識スキル以外に何をgetたいのかがはっきりしている	意図(Intent)	4.0	4.3	22	57	7	4
問 3	教授システム学専攻で, 自分が学習者としてどのような態度で学習に臨もうとしているのかがはっきりしている	意図(Intent)	4.3	4.4	22	54	10	4
問 4	教授システム学専攻の活動中で, 受け身の受講者ではなく学ぶ仲間の一人として貢献していきたいと思っている	プレゼンス(Presence)	4.6	4.7	19	58	9	4
問 5	教授システム学専攻の活動中では, 自分に未熟な部分があっても, 考えや気持ちを伝えたいと思っている	プレゼンス(Presence)	4.5	4.7	21	56	9	4
問 6	教授システム学専攻の活動に取り組む中で, 多様な考えや異なる意見に触れてみたいと思う	開放性(Openness)	4.9	4.8	8	70	9	3
問 7	教授システム学専攻の活動に取り組む中で, 自分の考えを大事にしたいと思っている	開放性(Openness)	4.0	4.1	26	49	11	4
問 8	教授システム学専攻の活動を通して, 学びに関する考え方が変化していくことも, 学びの機会と広くとらえ拒まないようにしたいと思っている	開放性(Openness)	4.7	4.8	10	70	7	3
問 9	教授システム学の学びに疑念が生じたら活動する前に解消してから取り組むと思う	信頼感(Trust)	3.7	3.9	22	46	12	10
問 10	教授システム学専攻を自分が得たい成果を得られる場として信頼している	信頼感(Trust)	4.6	4.7	17	60	9	4
問 11	教授システム学専攻で学習体験から何か大切なものが得られるに違いないとの確信を持っている	信頼感(Trust)	4.7	4.7	16	63	6	5
問 12	教授システム学専攻での学習に必要な操作スキルが何かを理解できている	I T	3.4	3.7	31	40	11	8
問 13	教授システム学専攻での学習に必要な操作スキルを習得する必要があると思う	I T	4.2	4.3	25	43	18	4
問 14	教授システム学専攻での学習環境を理解し, 受け入れようと思っている	態度	4.6	4.6	12	64	11	3
問 15	教授システム学専攻でのカリキュラムを理解し, 受け入れようと思っている	態度	4.6	4.6	11	65	11	3
問 16	教授システム学専攻での学習をともにする仲間を理解し, 受け入れようと思っている	態度	4.7	4.3	13	53	21	3
問 17	教授システム学専攻での学びの目標が不明瞭である【反転項目: 結果は反転後】	学習プラン	4.1	3.9	28	36	22	4
問 18	教授システム学専攻での履修計画 (少なくとも 1 年目の) ができている	学習プラン	3.0	4.1	61	23	3	3
問 19	必要に応じて履修計画を自分で修正できると思う	学習プラン	3.9	4.2	29	46	5	10